

第4回 Better Life 研究会 (2020年5月27日開催)

「セカンド・プレイスに出現したサードプレイス

校内居場所カフェの実践と報告」

石井正宏 委員 (NPO 法人パノラマ代表理事)

私たち NPO 法人パノラマは、学校の図書館で週に一回カフェを開いています。スタッフはメンバー以外にボランティアの方々が年間で 376 人、毎回 7~8 人来てくれています。カフェは年間 35 回前後開いています。生徒たちが親と先生以外の大人とたくさん出会ってもらいたくて運営しています。

私は引きこもりの若者の支援を 2000 年から始めました。宿泊型の支援施設で、引きこもりの若者の家に行って、ドア越しに話をしてなんとかしてドアを開けて出てきてもらう。寮と一緒に生活しながら、2~3 年、長い方なら 5~10 年かけて自立をしてもらう、ということをやってきました。

引きこもりの支援というのは、「対処型の支援」です。家に例えるならば「雨漏りのする家の床にバケツを置いていく」ような支援です。あちこちから水が落ちてきたらバケツやタライを置いていく感じです。いまそのバケツの水があふれだそうとしています。ということかという、引きこもる人の年齢が上がってきているのです。厚生労働省の若者の定義は「15~39 歳」ですが、地域若者サポートステーションでは、2019 年度は 44 歳、2020 年度は 49 歳まで対象を上げています。もう「若者」ではない方たちも支援しなくてはならなくなりました。それには税金が使われています。その支援によって働けるようになり、やがて「納税」できるようになるという前提で支援はあります。いわゆる社会的投資型です。

ただし、地域若者サポートステーションで支援していても 6~7 割は非正規雇用がゴールです。非正規雇用は正規雇用に比べて納税率が圧倒的に低いのが実情です。雨漏りを受ける「対処型の支援」ではなく、屋根裏に上がって行って穴の開いている天井を塞ぐ「予防型の支援」を 2009 年から始めました。

実際に高校生の実情を見てみると、中退者が国全体で 1 年間に 5 万人います。進路未決定者（就職も進学もしない）が同様に 5 万人います。フリーターが 1 万人、就職したけど早

## 「雨漏りのする家」

困ってしまったからの支援は、  
雨漏りのする家の床にバケツを置き、  
溜まった水を処理する**対処型の支援**。

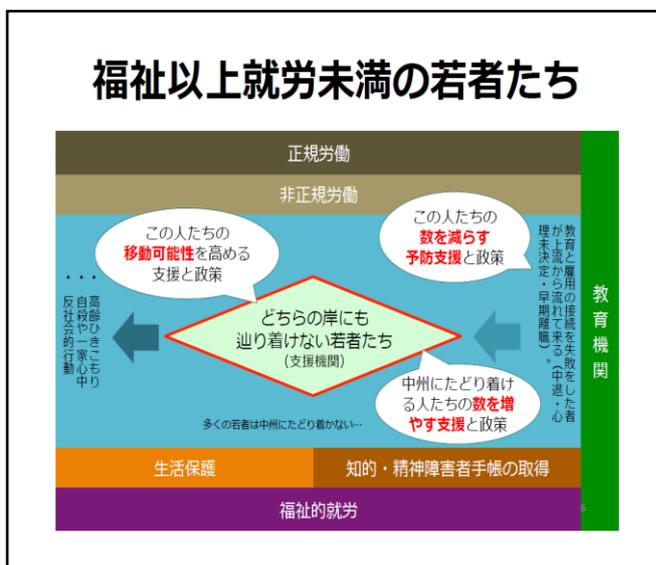
家(国)がビショビショにならないために  
対処することは絶対には必要ですが、  
このやり方だけではもう限界が来ています。

まだ困っていない、これから困りそうなたちへの  
**雨漏りの穴を塞ぐ予防型の支援**

Copyright © 2015 Sharecoro All Rights Reserved.

4

期離職した子たちが 3 万人います。この人たちは今後非正規に固定化され経済格差に飲み込まれていきます。



左は私が出会ってきた若者を表す資料です。

大きな川が流れていて、ひし形の中州があり支援機関を表しています。上流には教育機関があります。私が出会う若者を一言で表すならば、「福祉以上就労未満の若者たち」です。

日本で生きていこうと思ったら、「労働の岸」か「福祉の岸」のいずれかで生きていくしかありません。しかし、どちらの岸にもたどり着けない人たちがものすごくたくさんいます。

その上流にあるのが教育機関で、ここから多くの子たちが川にどんどん流れてきます。

また、多くの方は中州にたどり着くことすらできません。中州にたどり着けずに流れてしまい、高齢引きこもりとなり、一家心中などの問題が起きています。私はこの中州にいて彼らを待っていたのですが、「待っていたのではしょうがない」というわけで中州から上流に上がって、学校を訪問して支援を届けています。こういうのをアウトリーチと言います。

必要なことは、中州にたどり着いた人たちを「労働の岸」か「福祉の岸」のどちらかに行ってもらえるような、「移動可能性を高める支援と政策」であると考えています。どちらかの岸に移動してもらう、たどり着ける数を増やす、川に落ちてしまう人を減らす。これらが実現しないと支援をずっと行ってもバンクしてしまいます。

右の資料では、中州が学校（教育の丘）に食い込んでいます。私は所属を失うタイミングでしっかり支援することが大事だと考えています。そして、現在、中州からどちらの岸にもたどり着ける飛び石がありません。モノトーンのようなものではなくて、例えばお酒が飲める場所、遊びも含めてカラフルな飛び石が地域の中に増えるといいと思っています。



高校や所属を失ってしまうと、私たちや行政は子どもたちに働きかけることができなくなります。引きこもり支援の難しさは、「助けて」「S.O.S」と言わない人たちです。学校の進路未決定・中退者や企業からの離職になると誰も手を出せなくなってしまいます。ですか

ら、手が出せる高校に所属している間に支援をしたいと考えています。

皆さんは、クリエイティブスクールをご存知でしょうか。クリエイティブスクールは神奈川県に5校あります。この5校は面接試験だけで入学できます。このうちの2校で私たちはカフェを運営しています。

学校にどんな子たちが来るかという、勉強が嫌いだったり、苦手な子たちです。「勉強が嫌いなこと」と、「貧困」は密接につながっています。つまり、経済的格差は教育格差に直結しています。

世帯収入が200~300万円の世帯の子どもたちは、学力がついていけない状態になっています。日本は、企業と家庭に教育を丸投げしているわけです。例えばデンマークやノルウェーは、どの家に生まれようが平等な教育機会を得られます。日本は、どの家に生まれるかによってその子の人生が決まってしまうという、そういう不公平な国のように思います。

9年前、私たちと高校とのコラボレーションが始まりました。最初、校長先生と話しているとき、私は、校長先生に相談室ではなくて図書館で相談させてほしいとお願いしました。司書さんから了承をいただき、図書館で相談できるようになりました。

一般的な個別の相談室に行く子たちは、自分の課題は何かを顕在化できる子たちです。一方、私たちが図書館で会う子たちは、自分でも課題に気づいていません。交流相談で潜在的な課題を顕在化させて、個別の相談室につないでいくことが大事だと考えています。

ところで、居場所ってどんな場所でしょうか。居場所とはいつ来てもいいし、いつ帰ってもいい場所です。そして誰かのペースに合わせなくてもいい、誰ともしゃべらないという権利も持っているし、強制的に何かに参加させられたり、価値観を押しつけられることがない場所が居場所だと思います。ここでいう居場所は非教室的であり非学校的です。私は、学校の中に学校じゃないものが入りこむことが、モノトーン化した学校をカラフルに思っています。別の言い方をすると、学校というセカンド・プレイスの中に、居場所のようなサードプレイス的なものが入ることによって、生徒たちの息抜きの間、オアシスになると考えています。

セカンドプレイスに出現したサードプレイス

## 校内居場所カフェはどんな場所？

### 校内居場所カフェの3つのコンセプト

1. 安心で安全な居場所の提供
2. **文化資本のシェア（再分配）**
3. ソーシャルワークの起点

※「さぼり場」や「たまり場」であってもいいがそれだけでは居場所ではない。



そして私たちは3つのコンセプトを立てました。1つめは「安心で安全な居場所の提供」です。「学校は安心で安全な場所では？」と思うかもしれません。ところが学校は全然、安心でも安全でもないのです。授業中でもtwitterやlineを常に意識し、同調圧力の中で生徒たちはサバイバルをしています。そして、自宅に帰ってDVやネグレクトなどを受ける子たちがたくさんいます。そう

いう子たちに対して、安心で安全な居場所を提供することはとても重要だと考えています。

そして次のコンセプト「文化資本のシェア（再分配）」です。後ほどお話しますが、文化の再分配が重要であると考えています。そして、その居場所が課題の早期発見・早期支援の場という「ソーシャルワークの起点」であること、この3つのコンセプトで運営されているのが校内居場所カフェです。

ところで、貧困支援に関して、ピエール・ブルデューは、「文化資本、経済的資本、社会関係資本の3つの資本を多く持つ人ほど、進学や就職において有利であり高い社会地位につける」と言っています。貧困の問題とは「経済的資本がない」ということです。日本では憲法第25条で「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と、経済的資本を保障しているはずですが、生活保護では最低生活費しかもらえず、文化資本にアクセスできません。そのため、生活保護の人たちは文化資本を持たないので、社会関係資本につながれないのです。

貧困支援に必要なのは文化資本にアクセスすることです。経済的資本よりも文化資本をベースに置くと、社会関係資本につながるようになっていき、そうすると仕事を紹介されて経済的資本につながっていくようになります。こういう循環を作っていくことが、私たちNPOができることであると考えています。

70年代までは学校の周りに柵、フェンスがありませんでした。しかし80年代になると柵ができて、門が頑丈になってそこに「関係者以外立入禁止」と書かれるようになり、学校がブラックボックス化しました。柵やフェンスを取り払うことはできませんが、学校の中にNPOとして入って、校内居場所カフェを開いて学校のインターフェースになりたい、と考えています。

開かれた学校、カラフルな学校を作っていくためにもこういった形で民間とのコラボレーションが進んでいくと貧困支援につながると考えます。

最後に、私自身の「生きるストライクゾーン」を広げてくれたのは変な大人たちでした。今の子どもたちは変な大人たちに出会う機会が少ないと思います。「生きるストライクゾーン」が校内居場所カフェによって広がればと思います。そこで多様な大人に会うことによって、子どもたちの「生きるストライクゾーン」が広がることで、彼らの生存選択が増えていきます。

このように、支援ではなく、楽しく生徒と遊びながら文化資本をシェアしつつ、中退・進路未決定を予防しているというのが私の活動です。

<文責：全労済協会調査研究部>

